

Title	三田哲學と私(4)
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	横山, 寧夫(Yokoyama, Yasuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.61- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田哲学と私

名譽教授 横山寧夫

私は昭和 18 年 9 月の（戦時中の繰上げ）卒業であるが、当時私の専攻した社会学は哲学科に所属していたから形式上の名称は文学部哲学科卒業ということになる。それ以来、約 40 年間三田哲学会のお世話になった。その影響もあったのだろうか、私は社会学の実証的研究よりもむしろ社会理論とか方法論に興味をもち、ガリガリの実証主義的調査には反感すら抱いていた。助手に残って研究生活に入ってからも、30 歳台まで社会思想史、それも合理主義的哲学の裏街道とでもいべき神秘主義や感情哲学に親しんでいたのは三田のトミズムよりもむしろ私の若い頃のプロテスタンティズムの雰囲気だったと思う。こんなことが後年社会科学の方法論的立場として例のポッパー＝アドルノ論争などで、正統派からみれば Ausserwissenschaft に属するアドルノの側に親近感をもったのも、このような精神的下部構造のためだったかもしれない。

昭和 26 年に三田哲学会の機関誌「哲学」27 号が新しく戦後の復刊第 1 輯として復活したとき、私にも何か書けといわれて掲載してもらった「浪漫主義と敬虔主義」という論文は、ドイツロマン主義とピエティスムスの思想構造の結びつきを考察したもので、現在からみれば未熟な強引さはあるにせよ、幼い直観を頼りに初めて私なりの主張を述べたものであった。当时私はロマン主義の情緒の本質を現象学的（！）に解説しようと無謀な考えをもっていて、ドイツ文学の成瀬無極先生を困らせたものだった。松本正夫さんはこんなものは哲学ではなく文学だといわれたが、ノヴァーリスを信奉していた当時の私にはあまりこたえなかった。それから暫くドイツ精神史に深入りして毎号の「哲学」に投稿し、師であった新館先生か

三田哲学と私

ら、時々何をしているのか、とお叱言も頂戴したが、それ以上深く干渉もされなかつたのも昔の良き時代であった。後に私が友人の水田洋や城塚登たちと社会思想史学会を創めた素地はこんなところにあったと思う。

経験科学であろうとする社会学や心理学が哲学科から分離独立したのは私も一応当然であり正解だと思うが、これを専攻する現在の学生にも一部の研究者にも難しい抽象論議は哲学家に任せ経験科学は思想から無縁になることが本領であるかのように考える者がいるのは、私の経歴からみると何処かおかしい気がする。以前には実証科学の方法論的限界として「意味」をカットするのが社会学の常道であったこともあるが、私はその頃から人間の主体性や意味を中心に、社会学の体系を考えつづけてきた。現在はまた「意味学派」の大流行である。当然いい加減なものもある。一方私はいかなる社会学理論も、それが優れた普遍性をもつものであるからには、その研究者の根源的な思想と世界観と結びつかねばならないという観点から、近頃、社会思想ならぬ「社会学思想」という概念を提唱している。